



NO. 124  
27.3.7  
山崎郷土研究会  
兵庫県宍粟市山崎町  
大谷 司 郎

## 一三〇〇年前に成立した『播磨国風土記』

大谷 司 郎

### 一、はじめに

本年は、宍粟市の歴史を振り返って大きく二点を顧みる節目の年といえます。その一点は『播磨国風土記』が成立したのが、一三〇〇年前の霊亀元年（七二五）であること。そしてもう一つは、姫路城主池田三左衛門輝政の四男・石見守輝澄が山崎に入り、宍粟藩が成立した元和元年（一六一五）から四〇〇年の年に当たります。そこで、今回は『播磨国風土記』について、成立の経過や意義、そしてその内容について、若干の考察を試みてみます。

なお、当郷土会報の六〇号（昭和五十七年十一月発行）から三回連載で「宍粟の神々」と題して岩井忠彦氏が、『播磨国風土記』にてでてくる、宍粟を本拠地として活躍した伊和大神の考察を

### 目 次

一三〇〇年前に成立した『播磨国風土記』	大谷 司郎	1
『源氏物語』の写本と平瀬露香	浅田 耕三	4
段の観音堂絵馬伝説	河本 雅規	6
最上山・一本松・道沿いの樹	清水 哲	8
戦国時代 宇野氏と赤松氏の関係	竹内 克司	13
法蓮寺縁起	深川 定義	17
エッセー 椿は不吉な花か	里見 亘	18
二十六年度研修旅行記	宗平 圭司	20
写真集	会 報 部	21
「山崎郷土会報」総目次一〇一号〜一一〇号	会 報 部	22
事務局だより	会 報 部	25
編集後記	会 報 部	25

記されていますので、是非ご一読いただきたいと思います（宍粟市立図書館に蔵書有）。

### 二、『播磨国風土記』成立の経過

平安時代初期に書かれた『続日本紀』の和銅六年（七二三）五月二日の条に畿内七道諸国へ官命が下されたことが記されています。諸国に出された下命は次の五項目です。

①郡郷の名に好字を著（つ）けること

- ② 郡内の銀銅草木禽獸魚虫等の色目（品目）を記録すること
- ③ 土地の地味肥瘠の状態を報告すること
- ④ 山川原野の名称の由来をしるすこと
- ⑤ 古老の伝承する旧聞異事を記載すること

各項目を内容とした文書の提出を各国の国司らに命じています。その報告書がいわゆる『風土記』で、提出期限については触れていないため、報告の時期は、各国の事情でまちまちになっています。

現存する『風土記』は、播磨国の他、常陸国、出雲国、肥前国、豊後国の五か国の風土記で一般に「古風土記」とよばれています。そのうちで、靈龜元年（七一五）にいち早く成立したとされるのが『播磨国風土記』です。次に、『常陸国風土記』が養老二年（七一八）に、『出雲国風土記』が天平五年（七三三）に、『肥前国風土記』・『豊後国風土記』が天平十一年（七三九）にそれぞれ成立しています。このように、成立年で見ても『播磨国風土記』は日本最古の風土記といえます。

それにしても、『播磨国風土記』は下命を受けてから二年足らずで編集を成し遂げていますが、国司のみならず、それに携わるスタッフの熱意と努力は並大抵ではないだろうと想像されます。

当時の国司としては和銅元年（七〇八）に播磨守となった巨勢朝臣邑治（こせのあそんむらじ）がおり、その後任の石川朝臣君子（いしかわのあそんきみこ）も関わったものと言われています。どちらも単なる官僚ではなく、文人として優れていたことが

短期間の成立に繋がったものと思われる。また、編纂の実務に携わったのが、大目（だいさかん）の楽浪河内（さざなみのかわち）であって、楽浪は百済から渡来した父のもとで文筆に堪能であったことも幸いしていると言われています。

### 三、『播磨国風土記』の構成

現存する『播磨国風土記』は、平安時代後期に書写されたもので旧三条西家の蔵本（天理図書館蔵、国宝）が残されています。前述の靈龜元年（七一五）に作成されたものではなく、その写本は残念ながら巻首と明石郡のすべて、賀古郡の一部、赤穂郡に相当する部分を欠いているため、完本とは言えません。

『播磨国風土記』の構成をみると、賀古郡（かこのこおり）、印南郡（いなみのこおり）、飴磨郡（しかまのこおり）、揖保郡（いはいほのこおり）、讃容郡（さよのこおり）、宍粟郡（しさをわのこおり）、神前郡（かむざきのこおり）、託賀郡（たかのこおり）、賀毛郡（かものこおり）、美囊郡（みなぎのこおり）の順に記され、また、郡ごとには、郡名の由来、郡内の里名とその名の所以を述べ、伝承をもつ山川、丘野、津等も記されています。

### 四、宍粟郡の記述から

宍粟郡は、宍粟郡（しさをわのこおり）とよんでいて、その所以を伊和大神が領内を巡行していたときに、矢田村（現在地不詳）で大きな鹿の舌に矢があたっていたのに出遭ったので、鹿（シ

シ)に遭ったところ〓シシアワ、つまり宍禾(シサワ)と名付けたとされています。しかし、宍は肉の意であり、禾は穀物であることから考えると、狩猟と農耕の生活を基盤とする地域的特色をもとに郡名にしたのもあろうと言われています。

宍禾郡の里は次の七里となっています。

・比治里(ひじのさと)は、上比地、中比地、下比地の地名が残っていますので大方の見当がつかます。宇波良(うはら)村は現在の宇原、下宇原であり、比良美(ひらみ)村は現在の新宮町平見、川音(かはと)村は現在の川戸で、庭音(にはと)村は現在に比定する地名がありません。一説に一宮町能倉の庭田神社の辺りとも言われていますが地理的に離れています。以上四か村が記されており、比治里は宍粟郡南部の城下地区、戸原地区(新宮町の一部を含む)と考えられています。

また、比治里の里長が山部比治であり、里長から里名がつけられたと記されています。

・高家里(たかやのさと)には、村名としては塩村(しほのむら)一村しかなく、発音の近い庄能(しょうのう)村が比定されています。また、都太川(つたがわ)の記載があり、現在の蔦沢地区を流れる伊沢川であるとみられています。このことから、高家里は山崎中心部から蔦沢地区と考えられています。

・柏野里(かしわのさと)には、村名で土間村(ひぢまのむら)と敷草村(しきくさのむら)の二か村の記載があります。前者は現在の土万であり、後者は現在の千種町です。また、柏野は

「柏生(かしお)う」の意味で、転訛して現在の加生(かしょう)とすると、山崎町中心部西部から菅野地区、土万地区、更に三河地区を含め千種町までの地域が柏野里と考えられています。なお、敷草村には「鉄(まがね)を生ず」とあり、既に千種の地で鉄が産出されていたことを物語っています。

・安師里(あなしのさと)は、もとは酒加里とも須加とも言い、後に山部三馬が里長に任じられ、山守里(やまもり)のさととも言ったとあり、当時には、安師川によって里名としたことから、安富町全域と須賀沢が安師里の地域と言われています。

・石作里(いしつくりのさと)は、もとは伊和と呼んだ地域が、庚午(かのえうま)の年・天智天皇九年(六七〇)に石作里と改称した。その理由は石作首(いしつくりのおびと)が居住していたからとの記載があります。また、阿和賀山と伊加麻川の記載があります。阿和賀山は現在比定できる山が不明ですが、伊加麻川は、伊加麻に近似した地名に五十波(いかば)があることから石作里の地域は神野地区、河東地区、一宮町神戸地区南部、染河内地区が入るものと言われています。

・雲箇里(うるかのさと)は、伊和大神の妻神「許乃波奈佐久夜比売命(このはなさくやひめのみこと)」の容貌が麗しかったことから「宇留加(うるか)」にちなんだ里名と記載されています。波加村(はかのむら)の村名がみえることから、一宮町神戸地区北部(閩賀)から以北の波賀町が雲箇里と言われています。

・御方里(みかたのさと)は、里名の所以を葦原志許乎命(あし

## 『源氏物語』の写本と平瀬露香

浅田耕三

はらのしこをのみこと」と天日槍命（あめのひぼこのみこと）が黒葛（つづら）三条（みかた）を投げあって国占めに決着をつけようとしたとき、一条（ひとかた）がこの地に落ちたことで、その里名としたと記し、また、一説に伊和大神が土地占有の形見（標示）としてこの村に「御杖」をたてられたので「御形」とも記載してあります。なお、この地でも、「金内川で鉄（まがね）を生ず」とあり、金内川の比定地には諸説ありますが、阿舎利川が有力なようです。御方里は一宮町北部の下三方、三方、繁盛地区の三方谷をいいます。

以上、宍禾郡の記述をかい摘まんでご紹介しました。説明不足のことも多いことと思いますが、私自身は成立してから一三〇〇年という長大な年月を経ても残る郷土の史料と先人たちに思いを馳せる機会を与えていただいたことに感謝しています。

## 参考文献

- 『山崎町史』兵庫県山崎町 一九七七年  
 『一宮町史』兵庫県一宮町 一九八五年  
 浅田芳朗『図説播磨国風土記への招待』柏書房 一九八一年  
 上田正昭編『日本古代文化の探求・風土記』社会思想社  
 一九七五年

播磨学研究所編『播磨国風土記・古代からのメッセージ』神戸新聞総合出版センター 一九九六年

平成二〇年が千年紀であった『源氏物語』は周知のように紫式部によって書かれたものですが、式部自身が直接書いたものは残念ながら現存していません。

平安時代の半ばから長い中世に亘るほぼ六百年間、この物語を読みたいと思った人達は誰かから借りた五十四帖という大長篇の物語を筆で写し取っていたのです。その努力と根気は敬服のほかありませんが、深夜まで机に向かっていると、睡魔にもおそわれ、手や目も疲れて写しまちがいのこともでしょう。誤字や脱字もあり、中には不埒にも書写しながら、式部はこう書いているが表現をこう変えたほうがもつとよからうとか言つて勝手に書き変えたりもしたようです。

かくて『源氏物語』にはたくさん異本が生まれました。

藤原孝標なまよの女むすめの書いた『更級日記』（一〇六〇年ごろ）には伯母から長櫃ながびの蓋かたに入れて頂いた『源氏物語』を喜んで読むくだりが出てきます。同時代とはいえ、十六、七の少女が難解なこの書物をたのしんで読んだことも驚きですが、これも写本だったわけです。

さてこの多くの異本を眺めて鎌倉初期の『新古今集』の編者藤原定家（一一六二—一二四一）は、信用のできる多くの写本を集めて比較したり自分でも写本を作りました。

また、源光行（一一六三—一二四四）と親行（生没未詳）の親子も出回っている異本を検討し、よい写本を作りました。

近代に入り印刷術が進歩したため池田亀鑑という学者がさらに写本を整理してこれを系統だてました。その系統は三つに分かれています。

- 1、藤原定家の写本（青表紙本）
- 2、源光行、親行の写本（河内本）
- 3、その他の写本

です。

その中には五四帖中、四帖だけが現存している定家みずからが書写した唯一の本『前田本』があります。金沢藩主前田家に伝わったものです。

また定家の本を底本（原本）にして書かれた極めて良質の本が、昭和初期に佐渡で発見されました。おそらく中世に罪を得て佐渡に流罪となった殿上人の持物だったのでしょう。それを購入した人の名をとってこの写本を『大島本』といい、これが池田亀鑑の『源氏物語集成』という大著の底本になりました。

われわれが現在読んでいる本の多くは、この本にもとづいています。

そのほか公卿の中でも五撰家の筆頭である近衛家の陽明文庫には、やはり鎌倉期にかかれた写本『陽明文庫本』があります。

また古書収集家の保坂氏にも青表紙系の写本があり『保坂本』と称されています。

さらに尾張徳川家には、珍しく五四帖全部がのこっている『尾州本』があります。これは現存する最古の河内本です。

さて、宍粟市千種町を発祥地とする大阪平瀬家にも、鎌倉後期に書写された河内本と、青表紙本が伝えられています。

千種鉄の生産販売で財をなした平瀬家は、千種から山崎へ出、さらに京、大阪へ進出して本業のほか両替商や問屋もいとなみ近世大阪で鴻池や住友と並ぶ豪商となりました。その最盛期の平瀬家の当主が平瀬露香です。

天保一〇年（一八三九）生まれ、本名泰之助、諱は雅頭、俳号桃雅。

慶応二年（一八六六）二八歳で家督を継ぎ、三十二国立銀行を創立して頭取となったり演舞場を創設して自作の「芦辺踊」を上演したり多彩な実業家の顔を見せますが、露香の真面目は何といってもその傑出した文化人、粹人としての才能で、能をよくし、茶人としても超一流、さらに書や絵にも異才を発揮してそのこうした書画、茶器はいずれも各地の美術館、博物館に所蔵されている国宝級の逸品です。

先述の十三世紀の『源氏物語 写本』も尾州本と並んで価値の高い本とされています。

江戸末期の幕府と大名に巨額の融資をしていた平瀬家は幕藩体制の崩壊で大打撃を受けます。明治新政府の援助で一たんは持ち直しますがもはや昔日の俸はなく、明治四一年（一九〇八）、露香は七〇歳で永眠しますがそののこした文物は燦然としていて

平成二〇年、奇しくも源氏物語千年紀と同じ年の没後百年に大阪歴史博物館において平瀬露香展が開催されました。

その記念誌は宍粟市立図書館にあります。

参考

『源氏物語千年紀』（京都府、文化庁）

『なにわ人物誌平瀬露香』（大阪歴史博物館）

## 段の観音堂の絵馬伝説について

河本 雅 視

### 一 段の観音堂

山崎町段の山裾に十一面観世音菩薩をお祀りした観音堂があります。この観音堂は江戸時代後期、山崎藩主本多家の祈願所であったのですが、仏教建築では珍しく、神社建築のように、お堂の前に割拝殿のような絵馬堂があります。

その絵馬堂の天井中ほど、八畳の広さに、墨で描かれた大きな龍の絵があり、その片隅に「正徳五年（一七一五）未 夏 桑田氏常之画」のサインがはつきり見えます。惜しいことに龍の絵は、年を経て墨が薄くなっており、また天井板も一部傷んで来ています。しかし、龍の絵であることはよくわかります。

また、天井横の壁面に馬の絵馬の額が掛けられています。こちらは平成六年になってから故堀口春夫氏が描かれて奉納された

ものや、また、別にもう一つ松の木が描かれた馬の絵馬も奉納されています。

### 二 絵馬伝説

この龍の絵と馬の絵馬については、概要、次のような伝説があります。

「しそこの逸話」によれば、昔ある年のこと、山崎藩城下において夜な夜な田畑に怪獣が出没し、稲や大豆を食い荒らし、その被害は大変なものだった。そこで村人が夜の見張り番をすると、現れたのは怪獣ではなく、一頭の裸馬であることが分かった。後を追うと裸馬は足早に逃げ回り、周りの物を蹴散らし、とても手に負えるものではなかった。

ある日、若者が裸馬の住処を突き止めるため尾行していくと、段の観音堂の絵馬の中に入り込んでしまった。この話に村人たちはびっくりし、思案のあげく庄屋から山崎藩の馬術師範であった桑田氏常に対策を願い出た。氏常は暴れ馬を見事に捕え、観音堂の絵馬に追い込んで、絵のかたわらに松の木を描き、その木に手綱を結び付け、さらに、その馬が一番恐れるという龍の絵を絵馬堂の天井板いっぱい描いた。それからは、裸馬は一切出なくなつた。ということでした。

### 三 絵馬伝説から考えられる事

#### ① 天井の龍の絵

桑田氏常が龍の絵を描いた正徳五年はどんな年であったかを山崎町史で調べますと、年表に、正徳五年には「凶作のため領内百姓、御門につめかける」とありました。

龍は昔から雲を呼び、雨を呼ぶと言われています。観音堂の龍の絵も、正徳五年夏には、この地方は旱魃に見舞われ、凶作となり、百姓達にとつては生死にかかわる大問題であったのでしよう。その時の旱魃のために山崎藩においても、藩の祈願所において龍の絵を描き、雨乞いの祈願がなされたのではないかと思われます。

もう一つ、桑田氏常のサインの中に、正徳五年未夏となっている「未」という字は、これは干支（えと）の未（ひつじ）であり、8月となりますから、夏の日照り続きで旱魃となり、龍の絵を描き雨乞いの祈願がなされたと解釈できます。

## ② 暴れ馬のこと

逸話では夜な夜な暴れ馬が出て、田畑の作物を食い荒らしたと言いますが、なぜ暴れ馬なのでしょう。その答えがなかなか分かりませんでした。ある時テレビのスイッチを入れたとき、偶然大学の先生が、或る雨乞い神社のことを話していました。それは、その神社の境内を発掘された時、土で作られた馬が埋められており、しかも、どの馬も足が全部折られていると言うことでした。

その雨乞い神社は溪流のある谷川の横にあって、また谷川には洞窟があり、昔からその洞窟に、この神社の御神体である竜神が

住むと言われ、雨乞いの祈祷がなされてきたようですが、そのうえ先生の話では、「発掘で足の折られた馬が出てきたのは、馬は、晴天を喜ぶ動物です。だから、その馬の足を折って、雨乞いの祈祷がなされて来たのです」と言うことでした。

この話を聞き、段の観音堂の絵馬伝説で、馬が暴れたことも、また馬を、絵馬の中に松の木を描き、その木に馬を繋ぎ止めたことも合点がいました。（伝説の絵馬は現在それらしきものが、本堂正面軒下にありますが、風雨にさらされ絵は見えません。）

これらのことから私は今迄逸話とか昔話は、作り話であり、実話とはあまり関係が無いと思っていました。この話によって考えが変わりました。

この絵馬伝説は当時の人たちが、旱魃の大変な思いを後世の人たちに伝えたいと思い、興味を引く逸話として残されたと思います。そういう意味でいろいろな昔話もよく味わってみることも大切かと思いました。



段観音堂（絵馬殿）

## 最上山・一本松……道沿いの樹

清水 哲

山崎町に住み始めて、休みの日に時々もみじ山から一本松に登っていた。少なからぬ人達が、早朝に、昼前に、昼過ぎに、夕方にとそれぞれ好きな時間帯に登っているのを知った。十年前に退職し、勤め人時代にできなかったことをしてみようと思った、そのひとつが遊歩道・登山道沿いの樹木の名前を知ることである。

上寺の水道事業所付近に車を止め、坂道を最上山駐車場まで上がり、そこからぐねぐねと一本松に登る。まずは駐車場まで：（先のNHK「新兵庫史を歩く」の時と同じコース）。

ここで、インタネットで「岡山理科大学・波田研究室」↓「植物雑学事典」↓「種名一覧」と進み、以下出てくる木の名前をクリックして画像を見て下さればありがたい。

### 水道事業所から上の駐車場まで

水道事業所を上へ歩くと、3月後半からはヒサカキの花の匂いがする。左に曲がりながら進むと山側の陰に、コクサギやコガクウツギが生え、コクサギは5月に白い花を咲かせる。ミツマタの木もなぜか一本あるが、花が咲くと手折られることが多い。

石材置き場の前を右に曲がって登る。高い木が空に向かって伸びているのはユリノキだ。葉の形からハンテンの木、花の形からチ

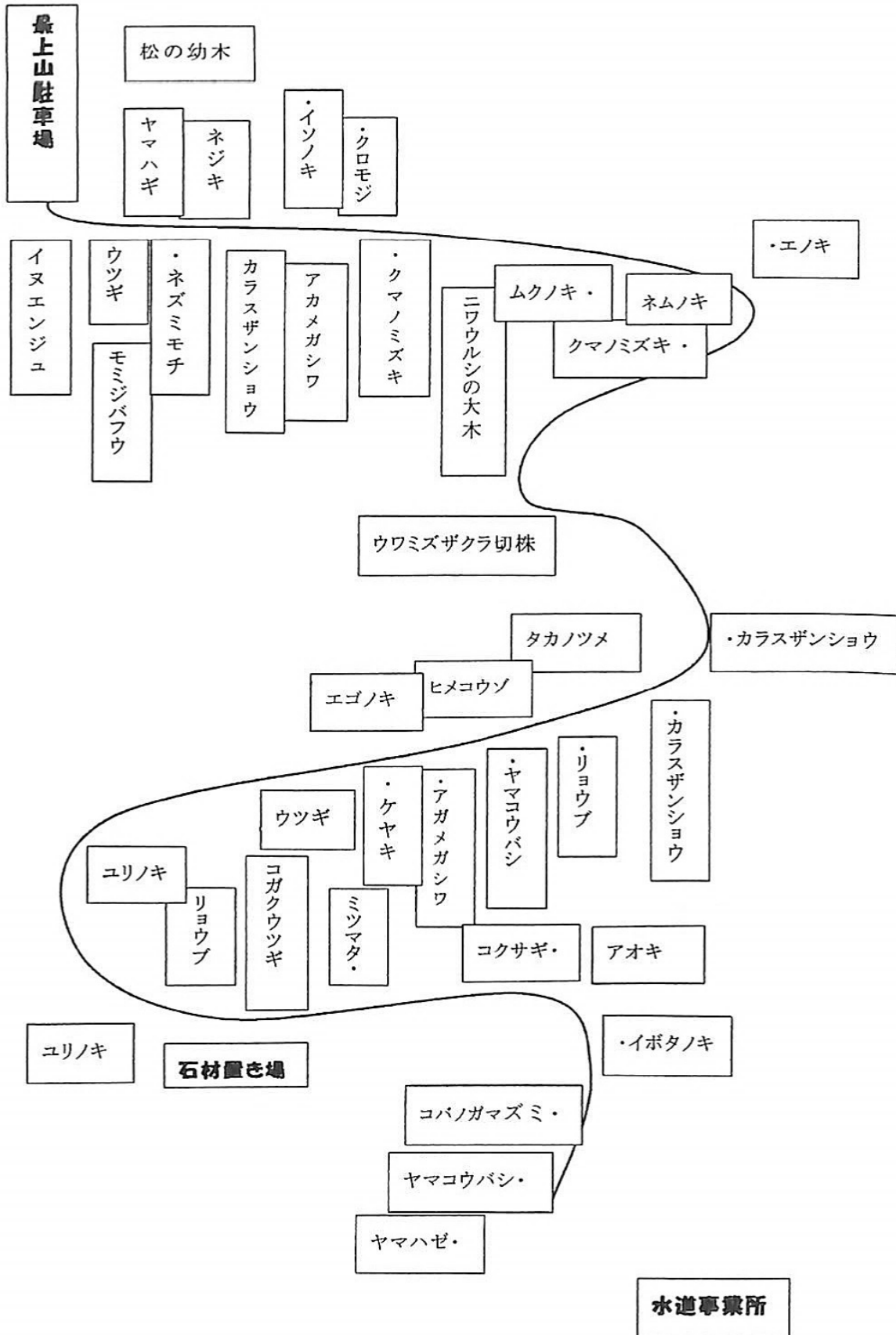
ューリップの木と呼ばれる。北米原産のこの木の花は高い所で咲き、目を凝らし耳を澄ませると、蜜を求めてクマバチが梢を飛び回る音がブーンと聞こえる。

ユリノキのトンネルをぬけると、5月後半には白い蕾が沢山ぶら下がった木が目に入る。これはエゴノキで、白い花を咲かせ独特の匂いを放つ。これまたクマバチなどが蜜を求めて盛んに飛び交う。やがて谷側に、アカメガシワ・ムクノキ・ヤマコウバシ・リヨウブ・カラスザンショウなどが並び立つ場所があり、私はいつも展示場のようなと思う。山側の斜面にはヒメコウゾの枝が伸び、タカノツメの三枚葉が目立つ。その先にはウワミズザクラが一本あり五月に独特の白い花を咲かせていたが、数年前に伐採された。

駐車場に向かう最後の左急カーブ付近には、エノキ・ネムノキ・クマノミズキが並び立つ。クマノミズキは六月にクリーム色の花がにぎやかに咲く。この時期に遠くの山で花が棚のように見えるのはクマノミズキではないかと思う。同じ道沿いに、山側にはクロモジが小さな葉をつけ、谷側にはネズミモチが六月に白い小さな花を咲かせる。

最上山駐車場の辺りにもアメリカ原産の木がある。モミジバフウとハリエンジュ（ニセアカシア）は公園樹砂防樹として植えられたのであろう。後者の白い花は房状に垂れ下がり、ミツバチやクマバチが蜜を求めて飛び交う。付近には夏に花を咲かせるイヌエンジュも生えており、同じマメ科で葉が少し似ている。





## 駐車場から一本松へ

水道事業所からの道は北向きの谷沿いだったが、駐車場まで上がってくるると急に視界が開けて明るくなる。駐車場の回りには、ネジキ・ナツハゼ・ヤマハギ・ウツギなどの低木が生えている。常緑の大木（杉・檜・樅）が影を落とすことも無く、やせ地ながらも日照が十分なためか。ネジキもナツハゼも五月ごろに釣り鐘状の小さな花をいっばいつける。ネジキの花の色は白く、ナツハゼのそれは赤みがかっている。

道のそばに「ネズ」という名札の付けられた針葉樹がある。ネズミサシとも言うし私の故郷では「モロギ」と呼んでいた。山陽本線や山陽道を岡山にかけて通ると、山に林立している。ここが尾根筋で松中心のやせ地であることを示すのかもしれない。よくみると五、六本はある。国見の森の尾根にも生えているが、竜野あたりでもやせ屋根でみえる。

一本松の登り口付近にフサアカシアがあり春に黄色い花を咲かせる。豪州原産のこの木も治山目的で植えられたのであろうか。石の鳥居をくぐると道の山側にガンピが生えている。ジンチョウゲやミツマタの仲間で和紙の原料である。同年代の友人によれば、昔この木を買いに来る人がいて、小学生の頃よく集めたそうだと。

頂上まで五回左に曲がるがそのたびにソヨゴという木が目立ちそれは頂上まで続く。二回目に右に曲がる手前の谷側に、赤茶色のクネクネした幹が目引く。シャシャンボという木らしい。少し行くとアベマキの大木があり冬には大きな葉を落とす。

ひとつ目の石のベンチを左に曲がるあたりから山側の足元に小さなコウヤボウキが生えている。これも木とのこと。十月ごろに薄紫の花が咲き、そのあとに種の綿毛が残る。

三つ目の左カーブあたりから、山側にはウリカエデやアセビが多くなる。四つ目の左カーブの石のベンチ下には、リンボクという常緑樹がどっしりと生えている（頂上にもある）。花は見たことがないが、五月ころは古い葉が赤くなつて落ちる。少し先の谷側に風変わりな葉のついた木が倒れながら生きている。注意しながら降りて枝を持ち帰り調べたらダンコウバイという木だった。図鑑の通り三月後半にまず花が咲く。

最後の右カーブ上にヤマモモの雌株があり梅雨時に実が落ちているが、傷みかけていることが多い。ジャスコの駐車場にも雌株があり、手を伸ばせばきれいな実を食べることができる。

一本松頂上には、天に向かってコシアブラやホウノキが枝を伸ばす。「二の丸」北西は繁った木々が伐採されて「畝状堅堀」を学ぶことができ、長水山もよく望めるようになった。あそこにはホオノキも何本もあり、大きな白い花が目の高さに見えていた。

二の丸からは空気が特に澄んだ日には瀬戸内海やその向こうの山なみが見える。地図を広げて方角を確認すると、それは淡路島の西端の山々で双眼鏡でかすかに風力発電塔が見える（空気のよく澄んだ日に、たつの市の金輪山を少し登ると家島諸島の男鹿島がすぐそこに見え、かすかに鳴門海峡大橋も確認できる）。長水山からも、人の話では国見の森の展望台からも海が見えるそうだと。



## 弱い木々のチャンス

さて、ここまで名前を書いてきた樹木は、水道事業所から一本松までの、道沿いにある木々だ。これらの木の多くは杉・檜・樅の繁った所では陽も差さず生きることができない。昭和四七年から四九年にかけて、門前から上寺へと最上山を越える林道の工事がおこなわれ、裸地や崖や斜面ができた。そのことによって、日照と場所が得られ、生きるチャンスが生まれたのであろう。うつそうとした森林においては背の低い「弱い」木は生えにくい。最上山駐車場から頂上までの道も、昭和四二年頃に「山」の字に見えるように伐採されたり道を広げる工事がおこなわれたりした。それで活躍の場を得た木もあると思う（尚、最上山越の道の工事年については市役所建設課に教えてもらった）。

もみじ山でも「弱い」小さな木をみつけた。オトコヨウゾメと中国原産のテンダイウヤクである。散歩道のすぐ脇にあり、いつ遊歩道整備の際に刈られても手折られてもおかしくないが、まだ生きて春には花を咲かせている。奇跡だと思う。このような木はどうやって子孫を残すのだろうか、どこか離れた、同じような環境の場所に仲間が点在しているのだろうか。

かつて最上山で、木の名前を熟知したおじいさんに出会った。若い時に仕事で勉強したらしい。私は六十才を過ぎての趣味なので調べてもすぐ忘れ、時々これは何の木だったかなと思いついて出している。勿論わからないままの木が多いが、長年通ったおかげでアカゲラ・アオゲラやタゴガエルなども目に出ることが出来た。

## 趣味で木の名前を調べた方法

(一) かつて国見の森で「木の名前を知ろう」という講習会があり、坂本昌<sup>清</sup>氏らに教えていただいた。

(二) こまめに歩いて木の花が咲いていればデジカメで写真を撮る。枝や葉を持って帰り、樹木を趣味とする人のためのサイトで確認する。頑張りすぎないよう気をつける。

・「木のぬくもり森のぬくもり」 花・葉から検索できる

・「岡山理科大 波田研究室」の植物雑学事典 画像と説明

・「神戸・六甲山系の樹木図鑑」

・「JUMOKU 日本産樹木検索」など

## (三) 書物

・山と溪谷社『樹に咲く花』三冊 冬芽から種まで

・保育社『検索入門 樹木』①②…葉から検索 難しい

樹木は同科同属に似たものがあり、趣味のレベルなので、木の名前の同定に間違いがあるかも知れず、平にご容赦を。

木の花は一週間で咲いて散るから、週に一回歩く…では気がつかないこともあり、その点は家庭菜園と同じだと思う。

もみじ祭りも過ぎて寒くなり、一本松に登る人も減ったが、いつもの人々が遊歩道や登山道を歩いている。遠来の人も登りだしたのは『官兵衛』で紹介されたおかげか。それはともかく、このような観点からここ数十年の実栗をみるのも少しは意義があるかなと思う。

# 戦国時代 宇野氏と赤松氏の関係

竹内 克司

赤松氏は鎌倉時代に始まる宇野氏の子孫

宇野という名字は鎌倉時代に宇野則景が播磨国佐用郡宇野庄の地頭職を任じられ、宇野庄の地名から宇野と名乗ったと考えられる。宇野則景の子家範が庄内の赤松村で赤松を名乗り、そこに赤松の名を世に知らしめた人物が現れた。それが、赤松則村（円心）である。則村は室町幕府の成立に貢献し、播磨国守護職に任ぜられた。



そして赤松家は幕府の職務の一つ京都市中の警察・徴税などを司る侍所の長官（所司）を務めている。

## 赤松家の概要（没落と再興）

嘉吉元年（一四四一）、円心の孫義則の子満祐が第六代將軍足利義教を殺害するという事件（嘉吉の乱）を起こしたため、幕府軍に追討され赤松は滅びた。これによって赤松の領地播磨・美作・備前は山名氏のものとなった。しかし、長祿二年（一四五八）再興を願う赤松の遺臣が南朝の神器を奪い返したこと（長祿の変）により、赤松家は幕府に再興が許され赤松政則が加賀半国の守護となった。応仁の乱以後播磨から山名氏を駆逐したものの、かつての求心力はなく、尼子氏の播磨侵入による弱体化や、家臣の浦上、別所などが力をつけ、自立・離反の動きの中で、織田信長播磨侵攻の流れに翻弄されていった。

## 偏諱で見る宇野氏と赤松氏

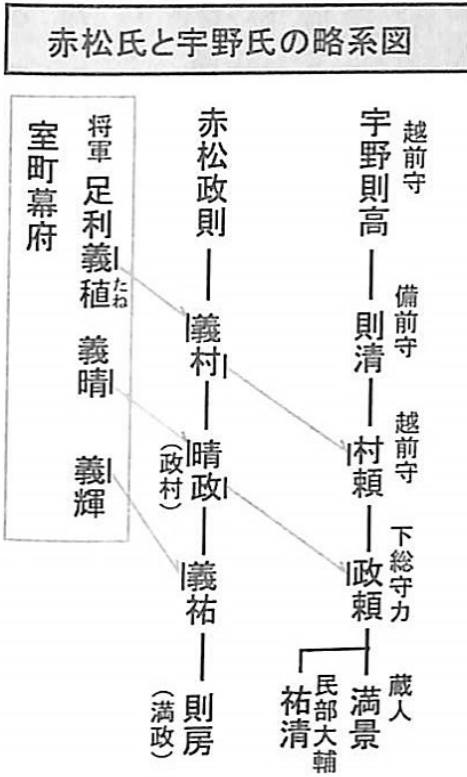
偏諱とは、將軍や大名が、功績のあった臣や元服する者に自分の名の一字を与えることである。赤松家は代々將軍家に仕え、多くは將軍から偏諱や官途を受けており、宇野氏も赤松氏より同様に偏諱を受けている。後期の赤松家では、赤松義村が室町幕府代十代將軍足利義種より、「義」の一字を、赤松晴政が第十二代將軍足利義晴から「晴」を受けている。同時に、宇野村頼が、赤松義村より「村」を、村頼の子政頼は、赤松晴政から「政」を受けた

と考えられる。偏諱からは赤松氏と宇野氏は形式上の主従関係は保たれていたことが伺われる。

戦国後期における宇野氏の軍事行動にみる赤松惣領家との関わり

★天文十一年（一五四二）赤松晴政の大田（太子町）の戦いに、宇野村頼・政頼父子が参加し、村頼が宇野の家臣安積平次郎の働きに対して感状を与えている『安積文書』。

★天文二十年（一五五一）頃、尼子晴久（詮久）の播磨侵入において宇野村頼は赤松晴政と決別し、尼子氏の与党となる『田路文書』。以後晴政に攻撃を繰り返す、晴政の居城置塩城近くの菅生（夢前町）で晴政父子との激戦があった『小南文書・小林文書・嵯峨山文書』。



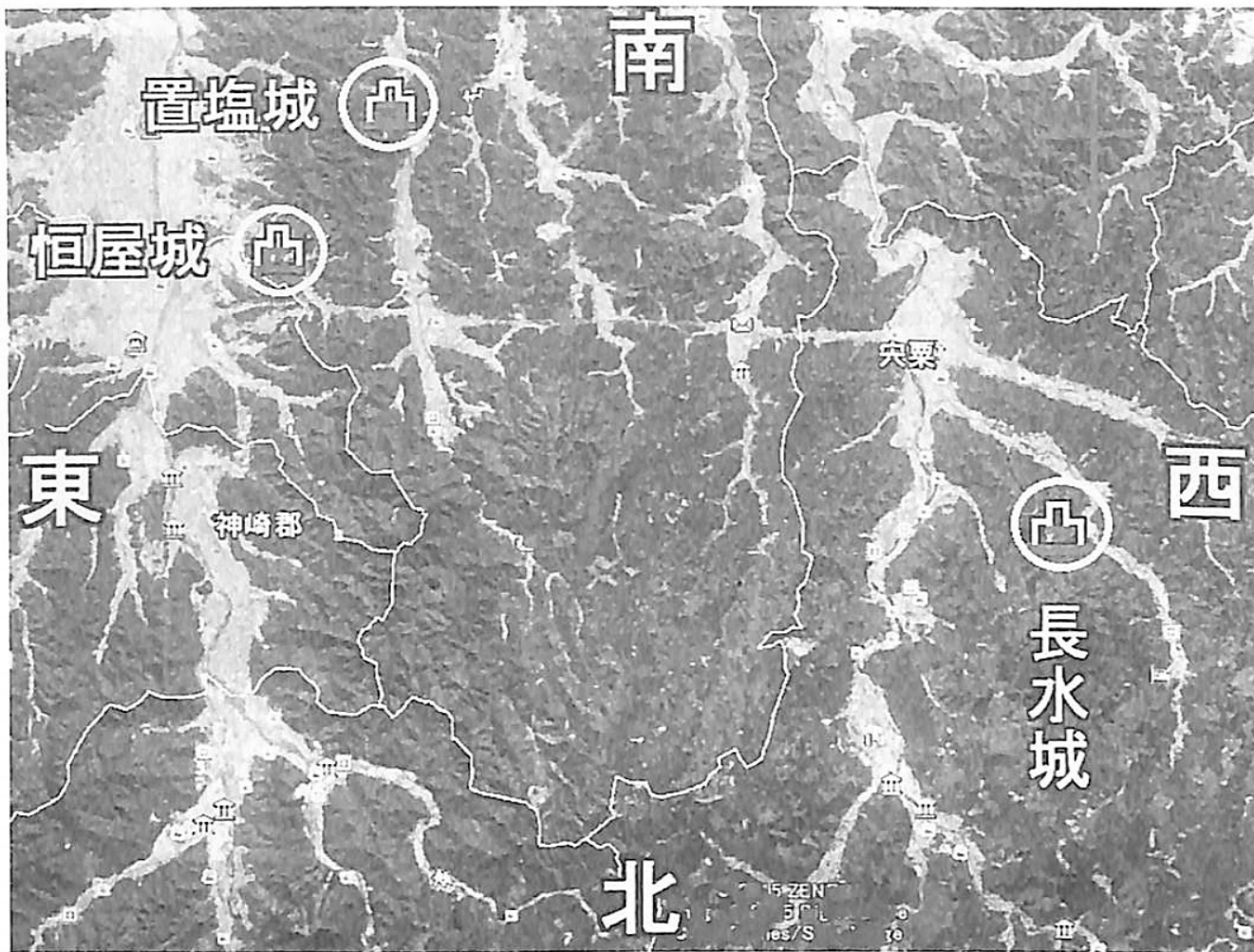
★天正三年（一五七五）恒屋城主恒屋肥前守（香寺町）が置塩城主赤松則房に夜襲を行うが、報復される。一説に恒屋城最後の当主恒屋正友は宇野政頼の五男で恒屋光氏の養子となったという。恒屋城の規模が地域勢力からみて大きく、赤松惣領家を襲った背後に宇野氏の存在があったと推測される。

★天正五年（一五七七）、羽柴秀吉の播磨侵攻に赤松則房は、秀吉の軍門に下っている。

★天正六年（一五七八）三月、別所長治が織田信長に反旗を翻し三木城に立て籠もる。同年七月、尼子勝久と山中鹿介が守る上月城（佐用町）が織田に見捨てられ毛利の手に落ちた。この上月の落城によって宇野祐清は反織田の旗色を明らかにした『吉川家文書』

★天正六年十一月、宇野政頼・祐清父子の軍が市川上流の大河内表（神崎郡神河町）に侵入し、赤松則房軍と激戦となる。『上月文書・安積文書』。反織田の旗色を示し、三木城を取り巻く織田軍を背後から脅かそうとしたものか。

★天正八年（一五八〇）四月、赤松則房が秀吉軍の先兵隊として広瀬（山崎町）において小競り合いがあった『安積文書』。



### 赤松則房、宇野攻めに加わる

軍事の記録を時系列的に見てみると、宇野氏は赤松氏に従順、決別、和解そして反目の動きが見られる。織田信長の播磨侵攻以前より別所氏や恒屋氏等の赤松一族の総領家に対する抗争や反乱が起こり、最期の当主赤松則房は、それをなんとか凌いでいた。

則房は秀吉にして「赤松殿」、「置塩殿」と呼ばれ他の武将とは一目を置かれていたが、もはや惣領としての誇りや威信は失われていたようである。則房は秀吉に全面的に従い、播磨最後の宇野攻めにも加わった。

ちなみに、則房は四国等の転戦を経て天正十三年（一五八五）羽柴秀吉の命により、蜂須賀家小六家政とともに阿波（徳島）へ移封し、徳島の板野郡内に一万石の領地を得たという。しかし阿波でその後足どりは途絶えた。阿波徳島で見つかった側近の上月氏の書状（上月文書）から、上月氏が則房に伴って阿波に移ったものの、徳島藩主蜂須賀家に仕えていることから、則房の身辺に何かが起こり、仕えることができなくなったことが推測されるのみである。



山崎闇斎神社の説明

「まち歩きガイド」の活動写真



興国寺山門の説明

「NHK新兵庫史を歩く」の写真 (26.10.25)



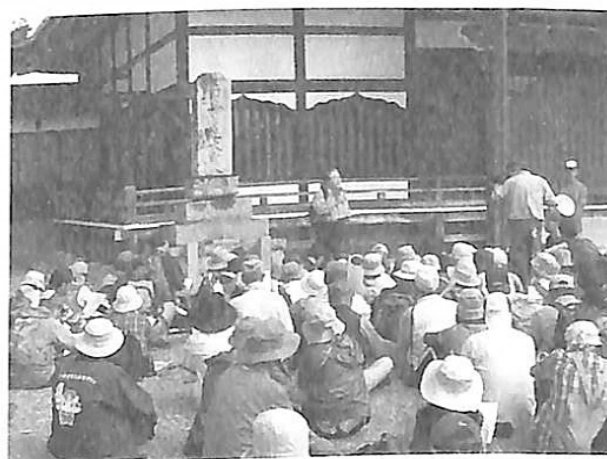
山崎八幡神社の説明



篠ノ丸城跡の説明



紙屋門の説明



青蓮寺の説明



# 法蓮寺縁起

深川 定義

宍粟市山崎町片山字轟の山麓に、小さい庵寺があった。宗派は日蓮宗、山崎町上寺（寺町）妙勝寺の子院（隠居所）であったと言う。

現在は跡地のみで、隣地に小堂二棟がある。

起源はかなり古く、慶長十三年（一六〇八）にはあった。『山崎町史』に法蓮寺高祖堂の名が庄家文書にあり、当時は下牧谷村の一部であった。延宝七年（一六七九）には、下牧谷ノ内片山村下々畑三セ五歩とあると云う。

延宝七年は本多氏（政貞Ⅱ忠英）が大和郡山より山崎へ来り、山崎藩主に就任した年である。

これによって、片山村が下牧谷から分村した頃が推定出来る。住職のうち、隣接する墓地に墓石の残るもののみを列記する。

五代本珠院日栄大徳 正徳三年（一七一三）十月二一日

宗善日理法師 宝暦二年（一七六〇）二月

玄達日泰法師 文政一三年（一八三〇）十月二五日

貞長日解法師 安政？（一八五？）

一九代 俊明院日理上人（明治二七年二月二五日）

この墓のみは巨大な自然石を用い、極めて目立つ。深信院観達日成の名も残る。

但馬国某とか。紀州牟婁郡岩崎村坂本某（岩崎は白浜温泉付近）とかの墓石もある。

坂井学明昭和五年九月八日（尼僧）坂井師の後は、無住、時に僧で無い人が住んだ事もあるが、主な住人には、小林某岡崎泰修師（戸籍名不詳）がある。

寺の敷地内には、ヤブツバキの巨木があり、高さ六米、目通り一・八米と『山崎町史』に記す。

廃寺後、妙勝寺敷地内に移植、中々の難事業だったが、今も花を咲かせている。又、寺の裏には谷川から水を引き、水行（滝行）の出来る装置があった。

喚鐘もあったが昭和戦中無くなった。昭和初期迄は、花まつりには、甘茶を供した。完全な廃寺は、昭和五十年代か。

妙勝寺には、夜泣き石、山田一等巡査墓（顕彰碑）がある。これらについては、本編の目的ではないので略す。

## エッセー 椿は不吉な花か

里見 亘

椿の花は、萼を残して丸ごとポトリと落ちる。その様子が「打ち首」を連想させるので、椿は「不吉な花」とされ、とりわけ武士が忌み嫌ったといわれている。

しかし、色も姿も美しい冬の花「椿」の、寒風に耐えて凛と咲き、美しい花の姿のまま枝を離れるその潔さは、むしろ武士好みの花ではないか、と私は不審を抱いてきた。

そこで、この疑問をただしたいと思い立ち、園芸の歴史の隙間を詮索してみた。

その結果、武士の時代に「忌み花」とされた記述は見つからなかったが、椿を好んだ侍の例は幾つも見られた。

紙幅の関係で多くは挙げられないが、数例を示せば次のようなものがある。

まずは安土桃山時代。武士による茶の湯が盛んになった時代で、椿は茶花として珍重された。冬の花の少ない時季に咲く花であること、その姿が侘茶にふさわしい花と考えられたことがその主な理由であろう。

次いで、江戸時代。

一、醍醐寺座主義演准後の慶長八年二月二十一日の日記に「白椿ホ

リテ將軍へ令進之了」という記載がある。ここでの「將軍」とは、その九日前に征夷大將軍の座についた徳川家康のことである。准后は、家康の征夷大將軍拜命の祝に「白椿」の木を贈ったのであった。

二、慶長十八年編纂の『武家神祕録』には、「將軍秀忠花癖あり、名花を諸国に徴し、これを後園吹上花壇にうゑて愛玩す。此頃より山茶流行し、多数の珍品を出す」と記されている。「山茶」は、椿の漢名である。

三、寛永十一年前後に制作されたと考えられている『江戸図屏風』（国立歴史民俗博物館所蔵）に、江戸城内の御花畠の様子が描かれている。これについて、奈良文化財研究所小野健吉教授の解説によると「將軍がいわば私的な時間を楽しむ庭園の一つである御花畠。そこでの主役がツバキであったことを示す屏風の図像は、園芸の愛好者でツバキにとりわけ深い愛着を持っていた秀忠がこの御花畠を設け、それを家光が受け継いだことを示しているように思われる。

（『江戸図屏風』から読み解く寛永期の江戸の庭園（日本研究No 50））

四、三代將軍家光の時代に、『百椿図』（根津美術館蔵）という絵巻物が刊行されている。作らせたのは丹波篠山藩主松平忠国で、描いたのは狩野山楽である。この『百椿図』には水戸光圀をはじめ当時を代表する文化人たちが四十九人が讃を寄せている。

なお、江戸時代には三度の椿ブームが起こったとされている。第一次のブームは、元和から寛永にかけて、第二次は寛文から享保の

頃、第三次椿ブームは享和から文政にかけてであるが、ここでは立ち入らない。

地方へ目を転じると、

一、肥後熊本藩六代藩主細川重賢は、武士の精神修養として園芸を奨励（「花の心のわかる武士であれ」）、藩士たちは「肥後椿」という華やかで気品のある美しい椿を作出した。これについて、文政十三年の『江戸白金植木屋文助筆記』には、三十品種もの肥後椿が記録されている。

二、「西王母」という淡桃色地に、ほんのりとした紅のほかしが入る、一重中輪の美しい椿がある。茶花の名花言われ、人気が高い。

この名椿を作り出したのは、芝山多門正明。加賀藩重臣前田内記純孝の家臣である。時は幕末の頃である。

正明は、江戸への参勤交代随行の際に、あるいは京の寺などで入手した「秋風楽」「東鏡」「江月」といった名高い椿を庭に植えていた椿愛好家であった、と伝えられている。

このように見てくると、武士が椿を忌み嫌ったとは考えにくい。

では、なぜ椿が「武士が嫌う不吉な花」と言われるようになったのであろうか。

これについては諸説がある。

一、椿ブームの加熱で、「椿は金の成る木」などと言われて珍種の売買、投機が行われいたので、寛政の改革で指弾されあらぬ噂が流された。

二、徳川家をはじめ武家では、椿は「高価な花」として扱われ、大いに珍重された。

それ故、平民には持たせたくないという思いから、「首から落ちる不吉な花」との噂を流した。

三、明治以降に、牡丹（あるいは山茶花）愛好家が、椿人気を妬んで流した噂である。

しかし、いずれも決定的な理由とは言えず、定かなことは分からない。

なお、椿の花がポタリと落ちるのは、花卉がその基部で互にくっ付き、更に筒状になった雄蕊と融合しているから、花卉が一枚一枚離れて散ることができない仕組みになっているからである。一般に、椿のような合弁花は桜や山茶花などの離弁花より進化の進んだ形態とされる。とりわけ椿は、花卉と雄蕊の合生、雄蕊の筒と花卉との合生と進化の度合いは際立っている。

椿は、移動範囲の狭い虫より、広範囲に飛び回る鳥に送粉を頼るのが有利だとして、虫の少ない寒い時季を選んで咲く。それ故、椿の花は鳥の吸蜜行動で花の形が壊れないようなしつかりした構造になっただけならぬのである。

## 二十六年年度研修旅行記

研修部 宗平圭司

今年度の研修旅行は、天下分け目の関ヶ原古戦場と養老の滝を訪ねました。

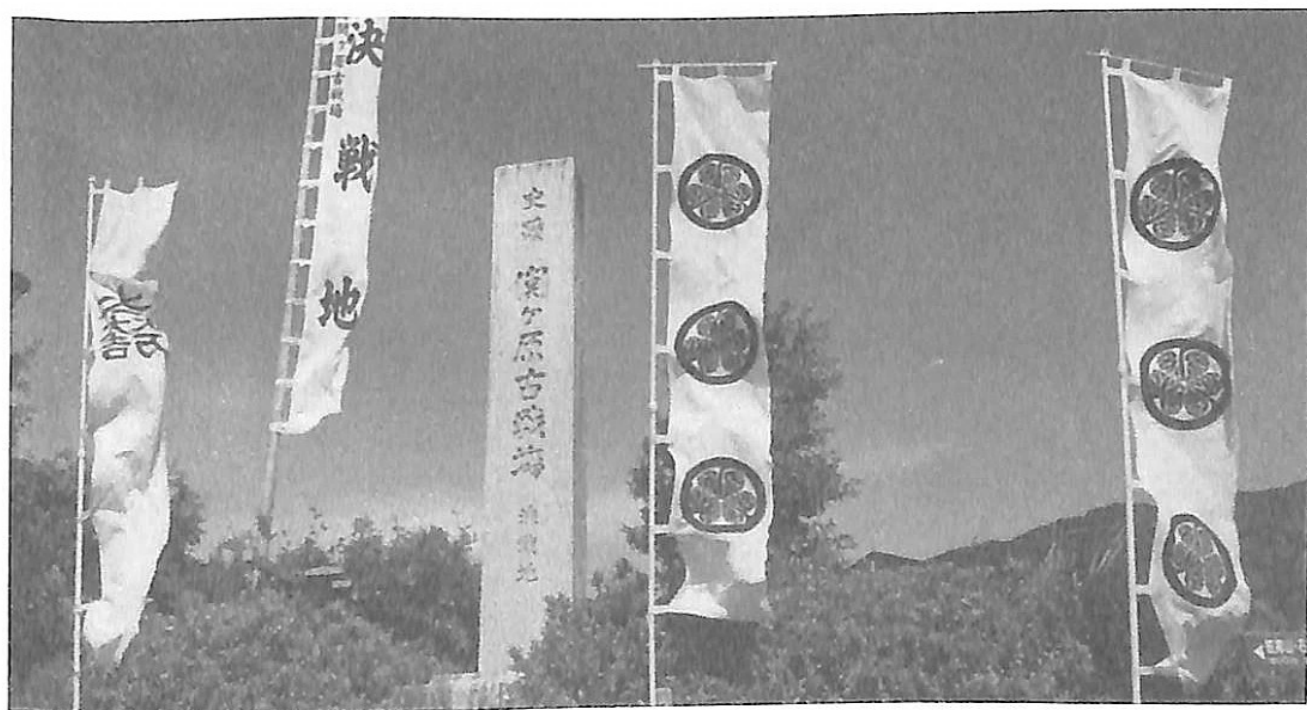
十月四日（土）好天気のもと、会員二十七名の参加を頂き、関ヶ原町ボランティアガイドの案内で往時を追懐することが出来ました。

最初に案内されたのが、古戦場の高台にある黒田長政の陣地です。ここは関ヶ原全体が一望できる好条件のところでした。長政は的確な戦況の把握と適切な対応、そして戦機を捉えての行動により東軍（家康）の勝利に貢献しました。

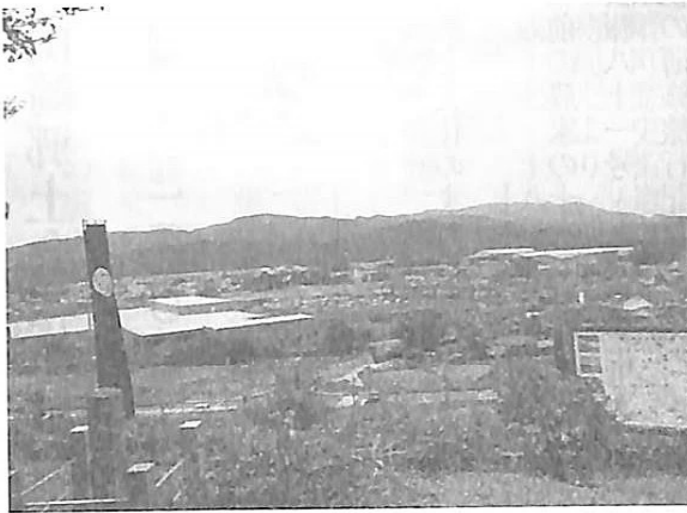
続いて高名な武将・大名の陣地、決戦の地を巡回しました。次に関ヶ原民俗資料館・不破関所跡・不破資料館を見聞し、関ヶ原一帯が四百年の時を経た現在でも戦国の息吹が聞こえてくるかのようにでした。

最後は日本屈指の名瀑布養老の滝です。道中の溪谷・溪流を眺めつつ喘ぎながら滝にたどり時の美しさ、まさに圧巻でした。存分に満喫しました。

戦国時代を終焉させた古戦場と名瀑布を訪ねた秋の一日、まさに感動の一語につきまます。有難うございました。



関ヶ原古戦場



関ヶ原遠景（黒田長政陣地より）

関ヶ原・養老の滝  
研修旅行写真  
(26.10.4)



黒田長政陣地 関ヶ原町ボランティアガイドによる説明



関ヶ原古戦場（岡山烽火場）



養老の滝  
(落差32m、滝の水が酒になったという親孝行の伝説がある。)

# 山崎郷土会報総目次

「山崎郷土会報」第一〇二号 平成十五年四月二十日発行

路傍観察(三)

―世紀を挟んでの考現誌―

殉死考

宇野 正磯  
浅田 耕三

自然と文化のまちやまさき

―やまさきのホタル―

河本 雅視

戦前の農家の十二ヶ月

谷井 伴夫

会報八十一号〜九十号総目次

会報部

秋の研修旅行記

森本 一二

平成十五・十六年度役員名簿

「山崎郷土会報」第一〇二号 平成十五年九月十五日発行

地域史随想

―北播磨の国あれこれ―

宇野 正磯

「鷹匠の戊辰役」について

浅田 耕三

中野の桓武伊和神社と平安時代の鏡について

片山 昭悟

子どもの頃の遊びとお手伝い

谷井 伴夫

春の研修旅行

織金 達雄

山崎町歴史街道(八)

会報部

会報九十一号〜一〇〇号総目次

「山崎郷土会報」第一〇三号 平成十六年四月二十日発行

【地域史随想】北播磨の紙漉き業

―杉(楢)原・海田・都多の紙屋―

宇野 正磯

川東古道

下村 哲三

兵庫県宍粟郡山崎町野字塚之元の経塚から出土した

「上方作」獣帯鏡(東京国立博物館所蔵)について

片山 昭悟

秋の研修旅行記

森本 一二

山崎町中井・段地区埋蔵文化財確認調査について

教育委員会

事務局だより

「山崎郷土会報」第一〇四号 平成十六年九月十五日発行

奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡の起源を探る

片山 昭悟

伊能忠敬測量隊が山崎へ

西川 博敏

大雲寺元祿における念仏講についての一考察

下村 哲三

長水城五十波構(構の城)

春名 俊夫

赤坂太郎と宝篋印塔

谷井 伴夫

長水城の伝説七不思議

中川 真理

蚕繭紙の寺(大雄院)をたずねて

春名 俊夫

「山崎郷土会報」第一〇五号 平成十七年四月十七日発行

【地域史随想】

高貴の出自につながる人たち(一)

宇野 正碓

シルクロード紀行

心のふるさと、はるかなシルクロード

金谷鏡の源流を訪れて

片山 昭悟

室町時代の領主と年貢

下村 哲三

山崎町須賀沢 長井家に見る

高瀬舟関係資料の読み出し(一)

森本 一二

農家の住宅と生活

山崎町歴史街道(九)

谷井 伴夫

事務局だより

平成十七・十八年度役員

会報部

「山崎郷土会報」第一〇六号 平成十七年九月十一日発行

宍粟市誕生に寄せて

宍粟市の誕生の思いを馳せて

大成みちよ

御形神社の祭神

伊藤 弘之

郷土史研究の広がり願って

石原 親雄

宍粟市の誕生と私たち

森本 一二

【地域史随想】

高貴の出自につながる人たち(二)

宇野 正碓

明治二十七年宍粟からの開拓団

篠津原野への挑戦

鎌田 裕明

昔楠木、今は乃木

浅田 耕三

山崎町歴史街道(十)

会報部

事務局だより

「山崎郷土会報」第一〇七号 平成十八年四月二十三日発行

高瀬舟関係資料の読み出し(二)

森本 一二

宍粟市における農民運動の一端

上山 勝

池田家履歴略記

浅田 耕三

山崎町歴史街道(十一)

会報部

事務局だより

「山崎郷土会報」第一〇八号 平成十八年九月十日発行

高瀬舟関係資料の読み出し(三)

森本 一二

閻斎遠景、野中兼山

浅田 耕三

「郡役所文書の世界」展を見学して

田路 正幸

「愛宕神社勧請奉祀の始まりと鉄山」

下村 哲三

山崎町歴史街道(十二)

会報部

事務局だより

「山崎郷土会報」第一〇九号 平成十九年四月二十八日発行

大正九年 第一回国勢調査についての考察

「被」の世界

小野の秋葉講の思い出

会長退任あいさつ

会長就任あいさつ

事務局就任あいさつ

事務局だより

平成十九・二十年度役員名簿

山崎町歴史街道（十三）

山崎町歴史街道（十四）

会報部

第一号

第三十号を会報七十二号

第三十一号

第六十号を会報七十三号

第六十一号

第七十号を会報七十四号

第七十一号

第八十号を会報一〇〇号

第八十一号

第九十号を会報一〇一号

第九十一号

第一〇〇号を会報一〇二号に

収録していません。

会報部

「山崎郷土会報」第一一〇号

平成十九年九月九日発行

宇野正碓先生を偲ぶ

会報部

前会長

森本 一二

会長

春名 俊夫

会報部

河本 雅視

会報部

片山 昭悟

鳩屋孫右衛門について（一）

下村 哲三

エッセイ「物の怪」

浅田 耕三



## 事務局だより

平成二十七年郷土研究会総会のご案内

本会の総会を次のとおり開催いたしますので、お繰り合わせのうえ、多数の皆さんのご参加をお願いいたします。

日時 平成二十七年四月十八日（土）午後二時より

場所 宍粟防災センター 四階 研修室

内容 事業報告、会計報告、事業計画、予算審議他  
記念講演に替えて

DVD「宍粟の郡を巡る播磨国風土記の世界」の  
鑑賞予定

このお知らせをもって、総会の案内とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

## 編集後記

『山崎郷土会報 第一二四号』をお届けします。

第一二四号は、充実した号になりました。

『山崎郷土会報』は、郷土の研究をすることであり、会員の皆様にとつて読みやすくわかりやすいものであること、年に二回、三月と八月に発行しています。

会員の高齢化により会員が減少していますが、『山崎郷土会報』を会員の増加になるようより充実した内容にしたいと会報部で心掛けています。

多くの会員の皆様の原稿が集まるようご協力をお願いします。

『山崎郷土会報 第一二四号』は、B5サイズの原稿ですが、A4サイズにしてはとの意見もあります。今後の課題です。

昨年は軍師黒田官兵衛の一年でしたが、今年、奈良時代に『播磨国風土記』が霊亀元年（七一五）にできてから千三百年になります。大谷会長さんが詳しく紹介されています。

また、今年、江戸時代に山崎にお城が築かれ、宍粟藩が元和元年（一六一五）にできて四百年になります。

今年、未（ひつじ）年で、木が年を経て枝葉が茂る意味もあり、二つの調査研究テーマとともに身近な話題なども紹介したいと思っています。会員の皆様の原稿を募集しますのでよろしくお願ひします。

（片山昭悟）

外科・内科

# 山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL②0036

ほっと、ひといき

# 伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、井物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1  
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362  
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO  
**Ueyama**  
P.C.S

# スタジオウエヤマ

- 山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204  
TEL (0790) 62-8027  
FAX (0790) 62-8827

心のゆとりのおてつだい

# 安井書店

# YASUI BOOKS

- 本店 TEL (0790) 62-0700
- さつき通り FAX (0790) 62-2117
- ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
- 山崎町中井 FAX (0790) 64-2052



パンフレット・デザイン広告  
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌  
ポスター・案内状・シール等

# (有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454  
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

まごころを伝えます。



地酒



確かな品質と味わい。

SANYOHA I  
山陽盃酒造株式会社  
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218  
E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

# 神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68  
(神姫バス山崎待合所内)  
TEL(0790)62-7588  
FAX(0790)62-0770



創業明治28年・さつき本舗  
御菓子司 ありき  
本店：播州山崎町山田 (電) 62-0160